

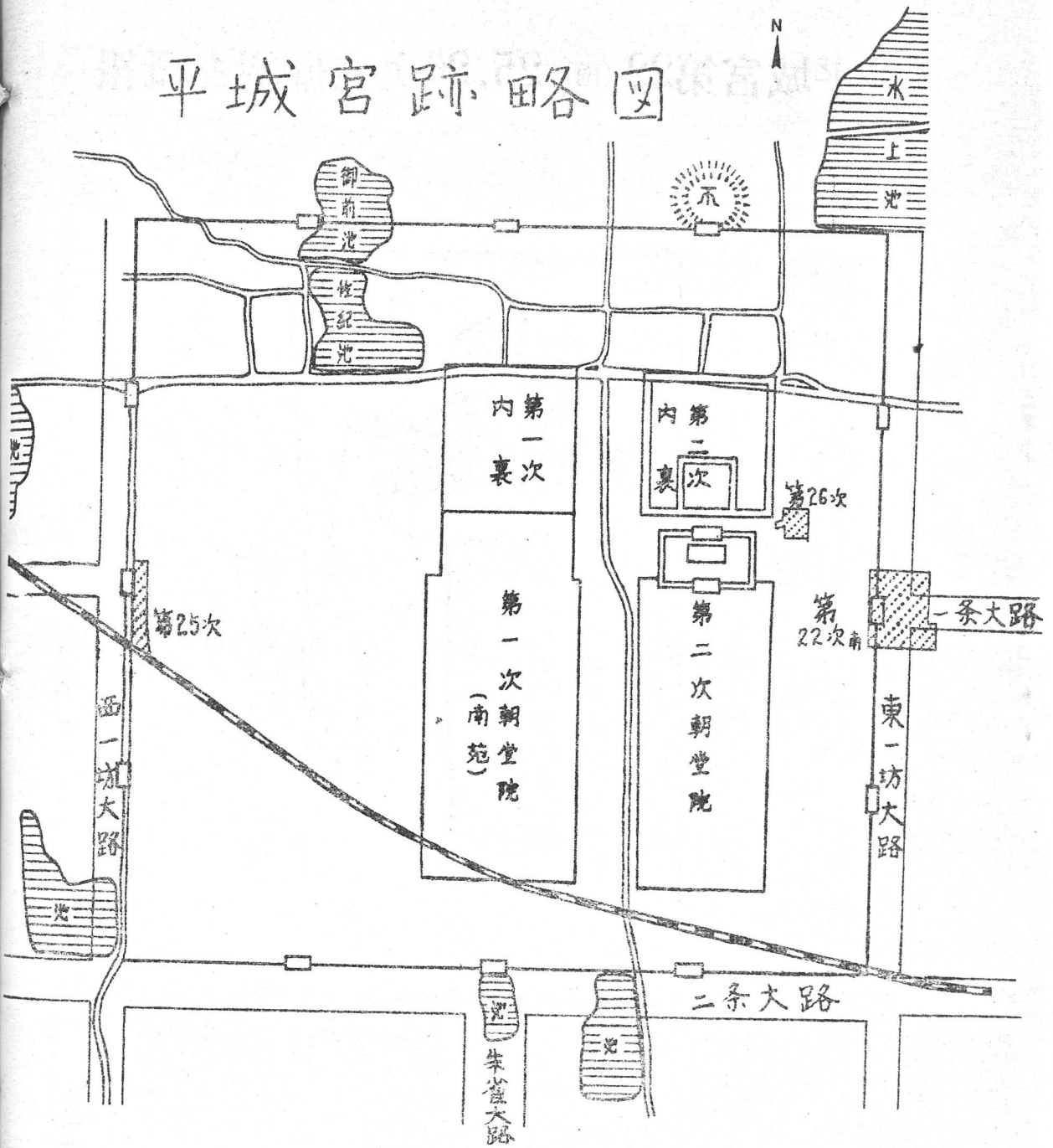
# 平城宮第22 (南).25.26次発掘調査概報



昭和40年11月

奈良国立文化財研究所

# 平城宮跡略圖



表紙カット  
 第22次調査出土浮彫騎馬像

## 平城宮第22(南)・25・26次発掘調査概報

特別史跡「平城宮跡」の昭和40年度発掘調査は、第22次南地区、第25次・第26次調査を終了し、現在第1次内裏附近の第27次、および宮城東南隅の第29次調査を進行中である。

ここでは既に調査の終了した地区について、その概要を報告する。

第22次南地区の調査は、北地区に引き続き、国道24号線バイパス建設にともなう緊急調査として、宮城東面の中央門、およびその東側隣接地域でおこなった。

第25次調査は、宮城西面の中央門推定地でおこない、第26次調査は、第2次内裏の東部で、その築地回廊から内裏外郭を限る築地に至る部分でおこなった。

以上の各次別の調査地区、発掘面積、発掘期間は次表の通りである。

次 数	調 査 地 区	面積	調査期間	
			月 日	月 日
22南	東面中央門とその外側 6AAE, C-L-R 6AAF, A-B, J, K, M, O-P	43a	2.4	7.3
25	西面中央門 6ADD, Q 6ADE, K-L, M	37.	3.27	9.13
26	第2次内裏東外郭 6AAD, H-I	12.	4.8	8.23

### I 第22次南緊急調査

第22次南調査地区は、東面中央門推定地のほかその大部分は、本来一坊大路および一条大路跡なのであるが、発掘の結果多くの遺構が見つかった。発見した主な遺構は、宮城外周をめぐる堀、掘立柱建物6棟、礎石をもつ建物1棟、門基壇1、柵ノノ列、井戸1基、数条の溝および懸樋または木樋を用いた導水施設2ヶ所、大小の上杭等である。

#### 1. 東面中央門について

東面中央門は、今回の調査ではその所在をほとんど知り得ないが、ただ一部の凝灰岩の残存等によって、従来の推定地からやや西へ寄って門があったものと考えられるが、確実には西に隣接する地域の

調査にまたねばならない。

従来の推定地中央には、南北に流れる溝SD3410（深さ約1.5m、幅3m）を全長7.3m発見した。この溝は当初素掘りであつたらしく、後に西岸を改修して玉石積とし、その南端を杭列で護岸したもので、さらに西側からはこの大溝に流れ込む暗渠による排水溝を4ヶ所発見した。

溝の堆積土中の遺物類は、主として奈良時代後半以後のものがみつかっている。

### 2. 外堀SD3236とその周辺の遺構

外堀SD3236は、素掘りで上下3層にわかれて発見され、最下層のもので幅1.2mであるが、上層の溝は上幅2m余で広く、少し東側へずれている。ある時期には側縁へ杭を打ち込んだ痕跡も認められる。また最下層の溝底面で、南北掘立柱柵SA3235（柱間各2.7m）を11間分発見した。これは恐らく外堀SD3236掘さく以前に、宮域を画した柵であつたと思われる。

外堀西方2.7mのところ、かなり大きい柱穴をもつ南北掘立柱柵SA3237（柱間各3.0m）を、23間分検出した。また外堀東方2m離れて、南北柵SA3280（柱間各3.0m）を13間分検出した。

### 3. 旧東一坊大路と大路上の遺構

発掘地域中央東寄りの部分において、南北に連なる溝SD3297を発見し、南半では現在の畦溝も同じ流路をとって南へ流れている。

この溝からは多くの木製品、土器類が出土している。ある部分では、溝の東側に接して築地痕跡、あるいはその奇柱穴と思われるものを確認した。

この南北溝と宮城外堀にはさまれる区域を、東一坊大路跡と推定している。

今回の調査で発見した遺物のうち、最大の規模をもつSB3322が大路上中央にある。7間×5間（柱間各2.7m）の東西棟で、四面竈と北

に孫廂が付き、床束と推定されるものをもつ建物である。

この南方約6m離れて、東西棟5間×3間(柱間各3.0m)建物SB3288があり、この両者間に東西柵(柱間各2.7m)SA3304を発見した。

さらに南方には、素掘りあるいは直径20~30cm大の玉石を側と底に用いた溝を、縦横に交叉した状態で発見した。

それは前後3時期にわたり、最も古いものは痕跡しか認められないが、後のものに関しては、側石、底石に改修を加えて最後の時期にまで使用したり、または途中である部分を閉塞して流れを変えたりして、かなりの年限にわたって使用したものと考えられる。

それらの溝は、調査地域の南辺で検出した東西溝SD3193に合流し、さらには宮城外堀へ流れ込んでいたようである。この玉石使用の溝で囲まれた北方中央には、5m×7mの掘りかたをもつ方2.1mの井戸があった。井戸の中には遺物はほとんどなく、井戸枠自身も最下段のみ遺存していた。

材料はこれまでの発掘によるものと大差なく、長さ2.3m、幅30cm、厚さ8cmほどの板を井籠組みにし、各板2ヶ所づつの木柄を埋め込んで段のつなぎとしている。

#### 4. 東一坊大路外方および推定旧一条大路周辺の遺構

南北溝SD3297にそって、南北棟4間×2間(柱間各2.1m)建物SB3223を確認したが、東側柱列は畦の下で検出できなかった。この南には小南北棟3間×1間(柱間桁行1.9m、梁行2.3m)建物SB3252を発見した。北辺には南妻2間(柱間2.7m)の直径約50cmもある柱根をもつ建物SB3400を検出したが、全体の規模は未調査地にあるため不明である。

東北隅近くに、妻て換えのおこなわれた柵SA3177、SA3178を発見し、その柱穴の中から「建殿」記載の木簡の出土をみた。

この南方には、東西棟3間×2間(柱間桁行1.9m、梁行2.4m)の礎石をもつ建物SB3161がある。この建物に接して北・西・南に木

種を使用した溝SD3159があり、兩落溝とも考えられる。また同一層位で付近には、木管を使用した懸樋に類する導水施設をニヶ所検出し、うち一ヶはSB3161に近接して、方0.6mの木枠を組み、溜水の施設を作っていた。この付近はかなりの盛土による整地層の堆積があり、その下層には流路を違えた数条の溝が南北に流れており、その堆積土中に「天平十九年」～「神護景雲四年」の紀年をもつものを始め、多くの木簡を発見した。

この地区では、複雑な土層の堆積をみたが、現在のところ明確な田一条大路の範囲を知り得ない。

#### 5. 東南隅(K地区)の遺構

南辺に東西棟5間×1間、またはそれ以上(柱間桁行3.0m、梁行4.2m)の建物SB3079を発見した。この柱根は径約40cmもあり、柱根のないものでは、柱穴上部に根石風に礎があつた。この建物の北西に基壇SB3116を発見した。その上面には、南北一列に4ヶ所の根石の存在を確認し、両端の柱間3.0米、中央の柱間3.9米で門と想定した。

基壇周囲は原形をとどめていないが、東側前面には基壇と同時期の溝SD3113が南北に流れている。さらにその下層にも一条の溝を確認したが、幅が広く基壇下部にもぐり込み、基壇構築以前の溝であることを知った。

この下層の溝から「平平勝皇八歳十一月」の紀年をもつ木簡を発見した。この溝を隔て、東側に南北榭SA3016が4間(柱間各3.0米)分あるが、門SB3116との併存関係は明らかでない。

門基壇南方には、約70cm間隔に杭を打ち込んで割板を横に入れ、深さ30cm、幅80cmの底には平石を敷きつめた溝SD3109を5.5m検出したが、基壇北方には続かず、その中央付近まで存続することを確認した。

#### 6. 出土遺物

出土した遺物のうち特記すべきものは、溝SD3159で出土した

二彩壺の口頸部(径15cm)、数点の緑釉埴、緑釉平瓦1点で、これらの多くは門基壇東方の部分で出土している。またこれまでの調査でみない鬼瓦が2種ある。

軒丸瓦、軒平瓦では、6282-6ク2/ 型式の組み合わせが目立って多い。

木製品では、南北溝S D 3297の堆積土中から鳴鏑(長さ4.5cm) / 4 が出土した。門基壇北東約7mの位置にあった土器溜りでは、ろくろ作りの容器が数点出ており、うちに、全面黒漆を塗った高さ55cm、底径6.8cmの高杯があった。

金属製品では、青銅素文鏡、帯金具等がある。

木簡は「和銅二年十二月」を始めとして、「神護景雲四年」に至る紀年をもつもの、また「縫殿」と記載されたもの等がある。

以上今回の調査では、22次調査の北地区で明らかになったと同じく、旧東一坊大路の推定地には数々の遺構が発見され、宮城内の建物がいつの間にか外部へ拡張していることを知った。この拡張は出土木簡等から考えると、北地区でみた如く、およそ奈良時代中頃から始ったもので、宮内官衙に關係した建物が造営されたと思はれるが、なおその詳細は今後の調査の課題である。

## II 第25次調査

第25次調査で発見した主な遺構は、門、及びその東側に南北に連なる掘立柱柵2列、掘立柱建物3棟である。

これ等の遺構の造営時期について述べると、門と柵は、門が構築された当初において、併存した可能性が考えられるが、掘立柱建物3棟については、いずれも、柱穴の壘積、柱廻りの一致などがなく、時期的に区分するよりどころはない。

門のB3600.西半部は、現在の道路下になっており、調査は不能であった。調査を行った東半部では、基壇上面が削平され、地下に掘込んだ基礎地盤の基底部が僅かに40cm程度残っているのみであるが、黄褐色土と暗

灰色土を交互に築成した地固めの土層を、極めて明確に見ることができ  
る。門の基壇築成範囲は、南北が29.5mである。

東西は、西半部が道路下にあるため、確認することは不可能であったが  
西面南門の東西14mの数値を援用するならば、門の西端は、宮跡西辺  
を南北に走っている現在の道路の西端付近になる。

大垣SA1600は、築地本体が道路下にあり調査は不可能であった。  
犬走り部も、調査地区北半では、削平され痕跡を止めなかったが、旧秋  
篠川の河道SX1579が大半を占める南端部において、一部確認してい  
る。

この地区では、河床から一定の高さまで盛土し、旧河道を閉塞して、そ  
の上に犬走り部分を含めて地固めをおこなっている。盛土の下で検出し  
た土塚SK3585からは、解読不能ではあったが、木簡が一点出土して  
いる。

柵、SA3590とSA3680は、大垣の東15mを南北に連る一連の  
もので、門を中心にして、南北に対称に配されている。柱間は、約2.7  
m等間で、SA3590では、26間分、SA3680では、10間分検出  
した。SA3590の北端は、門の前に穿たれた土塚SK3650により確  
認できなかったが、門に対して、SA3680の南端と対称の位置から始  
まるとすれば、この柵は、門の正面で8間分開放されていることになる。  
SA3590、SA3680をあわせると、140mほど検出しており、方  
位は、北で70m、西に偏っている。この柵は、門と同時に存在したと  
考えられるが、調査地区南端部では、奈良時代の整地層と考えられる黄  
褐色土の下から柱穴が掘られており、平城宮の比較的古い時期の造営と  
することができる。

南北棟建物SB3690は、梁行2間、桁行を6間分検出し、北端は、  
未発掘地にはいって未検出である。柱間各2.7m、柵SA3680の東に  
隣接するが、柱筋は通らない。

東西棟建物SB3640は身舎3間×2間、北に廂のある建物で、柱間  
は2.1m等間である。南北棟建物SB3560は、7間×2間、柱間各2.2



て、棟方向が北でやや西に偏っている。この建物の北、約6mのところでも西に走る冊SA 3567があり、柱筋の偏りがほぼ類似するところから、同時期に存在したものであろう。

建物SB 3560に先行する、南北の冊SA 3557は、柱間2.1mで、18次発掘調査の北側東西トレンチで検出した柱列と、方向、柱間が、ほぼ一致し、この地区まで連続する可能性がある。

#### 平城宮以前の遺構

古墳時代の遺構として、旧秋篠川河道の堆積砂層を掘り込んだ土塚があり、布留式の土師器が出土している。

東南に走る2条の溝SD 3620、SD 3570では、遺物が、溝の赤砂中にはなく、上層の埋土中からのみ出土し、弥生式土器、土師器が混在している。他に、弥生式土器と土師器が出土した遺構として、SK 3670、SK 3675がある。

#### 平城宮以降の遺構

この調査区域ほぼ全域に、瓦器の包含層があり、この付近に、中世の村落の存在を考えることができる。

南北棟建物SB 5599、3間×2間、1.8m等間、柱穴も小さな穴で、中から瓦器が出土する。井戸SE 3605は、極めて浅いものであり、方1m程度の井戸枠が残っている。井戸SE 3595からは、多量の瓦器と曲物の破片を発見した。

### Ⅲ 第26次調査

第26次調査で発見した主な遺構は、掘立柱建物10棟、築地1面、冊3列、溝6条、土塚1ヶ所などである。これらの遺構の大半は、調査地域東辺を除いて、北西から南東にゆるく傾斜する地山上から検出した。遺構は、柱穴の前後関係や、配置状況からみて、7期に分けることができる。

A期、調査地域東半に、地山の傾斜にそって、北西から南東に走る3条の赤土の溝、SD 3493、SD 3450、SD 3439がある。

B期、大規模な造営がおこなわれ、各建物が整然と配された時期で、建物

3棟、築地/面が葺きされている。

調査地域東端には、南北方向の築地 SA 705 (柱間各2.97m, 幅2.97m)がある。これは東辺部一帯に盛土を行ない整地後に構築されている。東端は水田造成時に破壊され一段低くなっているため、基壇幅は確認できなかった。奇柱間の上には、厚さ25cm程度の築地版築が認められた。

西側では、幅90cmの犬走りと幅30cmの瓦片を敷いたと思われる雨落溝を検出した。この築地は今次調査で9間分を検出した。

築地から西約9mを隔て、東妻柱通りを揃えた東西棟の5間×2間の建物が2棟ある。

両者とも、東妻柱通りから2間目に間仕切りがあり、まったく同一平面を示している。北側のSB 3500 (柱間桁行14.71m, 梁行5.91m)と、南側のSB 3480 (柱間桁行14.76m, 梁行5.94m)とは、柱間2間分を隔て、各柱通りはよく揃っている。

さらにSB 3500から柱間3間分西に、三方に雨落溝をめぐる南北棟の1間以上×2間の建物SB 3530 (柱間桁行29.5m, 梁行5.88m)がある。この建物の北妻柱通りは、SB 3500の南側柱通りと揃っている。しかし、前記の2棟に比較すると、柱穴が方々あり大形である。

C期 西側柱通りの柱樞方がSB 3500, SB 3480の東妻柱通りのそれと重り合った、南北棟の7間×2間の建物SB 3440 (柱間桁行20.90m, 梁行5.80m)がある。

D期 SB 3530と重複して、南北棟の6間以上×5間の建物SB 3520 (柱間桁行16.40m, 梁行15.29m)がある。この建物は、2間の身舎に、東西に廂 (梁間2.97m)、さらに東側へ孫廂 (梁間3.4m)を取り付けている。柱穴は、身舎で方約1.3m, 廂で方約0.8m, 孫廂で方約0.5mと順次小さくなる。

E期 SB 3530に重複して検出された、南北棟の1間以上×2間の建物SB 3550 (柱間桁行2.76m, 梁行5.67m)と、調査地域南端で築地雨落溝から西へ19mにある、東西棟の5間×1間以上の建物

SB 3430(柱間桁行13.45m, 梁行25.3m)の2棟がある。両棟とも、柱穴は方約60~70cmで小形であるが、比較的よく揃っている。

F期 調査地域の中央南寄りにある、北でやや西に振れた、南北棟の3間×2間の建物SB 3465(柱間桁行27.7m, 梁行34.8m)がある。柱穴は小さく不揃いである。

F期 SB 3465と入側柱通りをほぼ一致させながら、柱位置をやや南にずらした、南北棟の5間×3間の建物SB 3460(柱間桁行14.5m, 梁行9.03m)がある。この建物は、四面廂(東、西廂梁間3.25m, 南、北廂梁間3.1m)を取り付けており、妻柱通り中央2間は1.75mを示し小さい。

SB 3460の西3.3mに、柱通りを一致させた南北棟の3間×2間の建物SB 3470(桁行8.08m, 梁行4.76m)がある。この建物の四隅の柱穴は、他の柱穴に較べて大きい。

E E期に属する建物の特色は、桁行方向がいずれも北で西に偏していることである。

その他の遺構として、C期以降におさえられる土坑SK 3469、D期の建物SB 3520の柱掘方との重複関係から、D期以降にあたる柵SA 3473、SA 3514、F期以後の柵SA 3461などがあるが、その他の遺構は時期不明である。

さて、今回の調査で検出された遺構のうち、造営時期が推定できるのはB期である。この期の建物が、29.5mを規準尺として柱間が10尺等間であり、また、柱置りがすべて10尺方眼上に揃うことから、第二次内裏造営期(Ⅱ-I期)におくことができる。

発見した遺物は、瓦、土器、それに少量の埴、銅銭片である。瓦類には軒瓦の他、瓦3個、「理」の刻印のある文字瓦1片がある。

軒瓦類は第二次内裏地区で指摘されているように、ここでも6311と6664の組み合わせが最も多く約45%を占めている。したがって、ある時期にこの地区が内裏に関連する地区であることを裏付ける。出土した土器の半数は土坑SK 3490からである。土坑出土土器のなかで、後志器壺が多く見られる以外、著しい遺物はない。

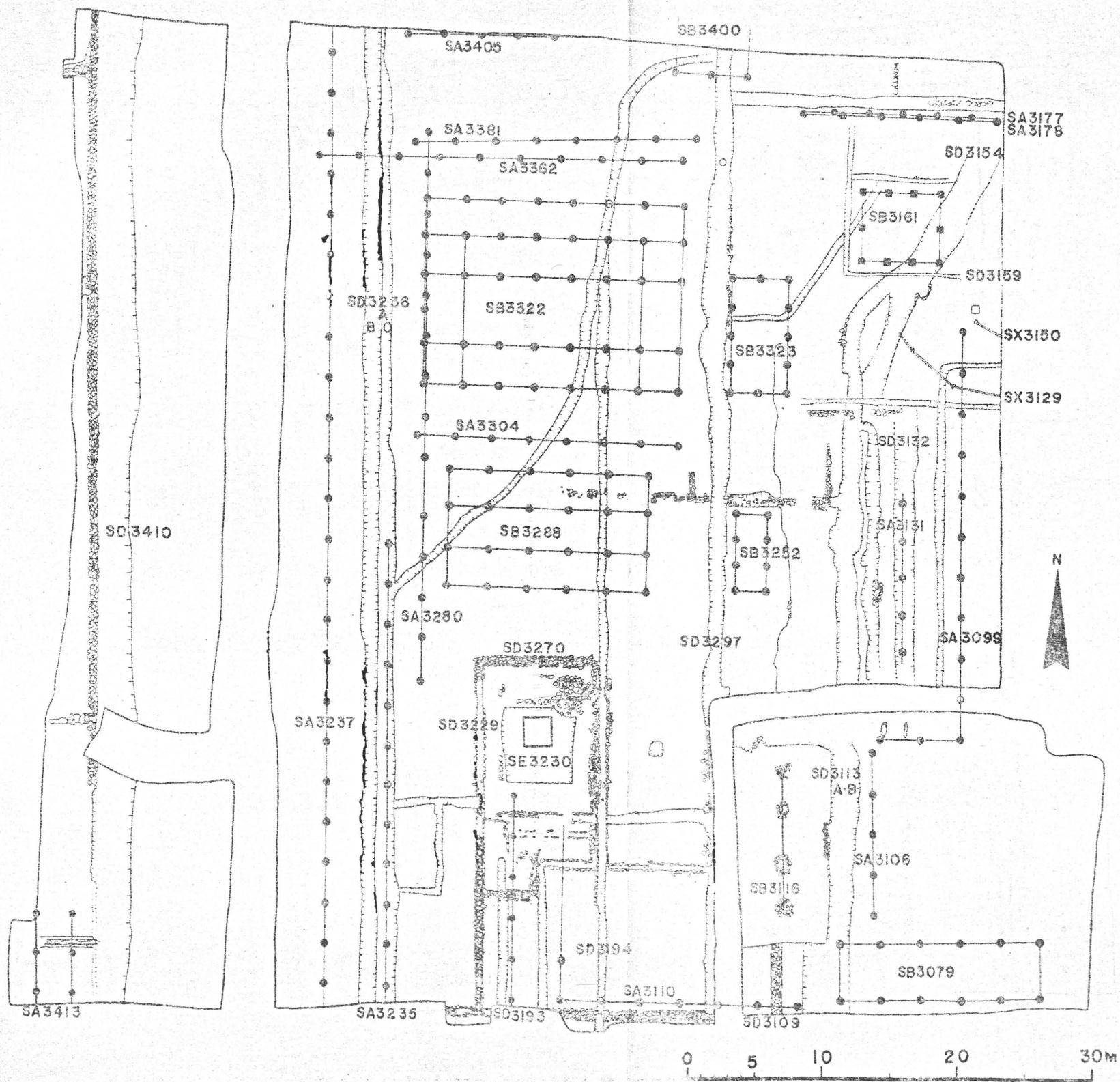
今次調査で検出された、B期の遺構について考察してみよう。

築地SA705は、内裏外郭を圍繞する大垣と考えられているが、内裏内郭で判明した295cmを基準尺とすると、この築地心から内裏正殿中軸線まで500尺を、築地回廊心まで200尺を計ること。

Ⅱノ1期に置かれる検出建物が少ないので確定はできないが、その基準尺が同様295cmで10尺等間の方眼に柱通りが揃うこと。さらに築地SA705の基準尺が297cmであり、築地回廊のそれと同値であること。以上の事実からB期の遺構は、第二次内裏に関係した付属殿舎といえよう。

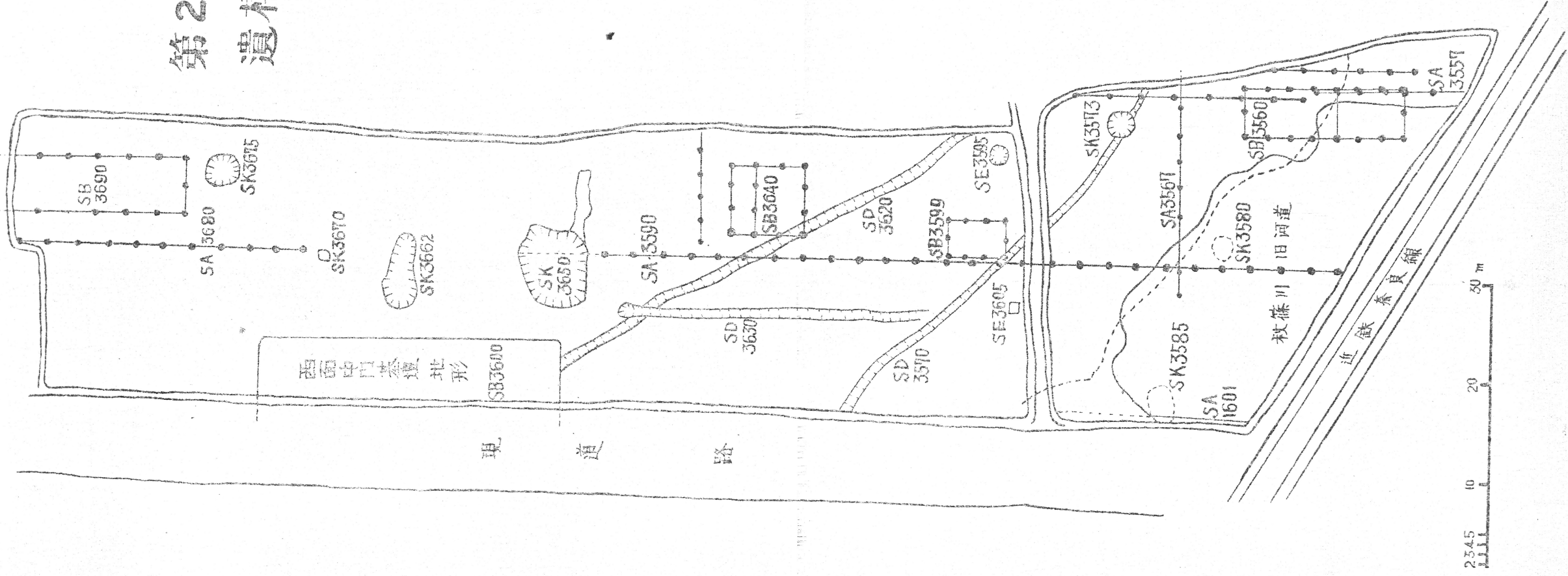
第二次内裏の造営に当っては、マスタープランに基いた計画的な地割りが行なわれて、構築物を配したと推定される。

# 第22次南発掘遺構配置図



# 第25次発掘

## 遺構配置図



1/500

25.45 0 20 50 m



# 第26次発掘遺構配置図

